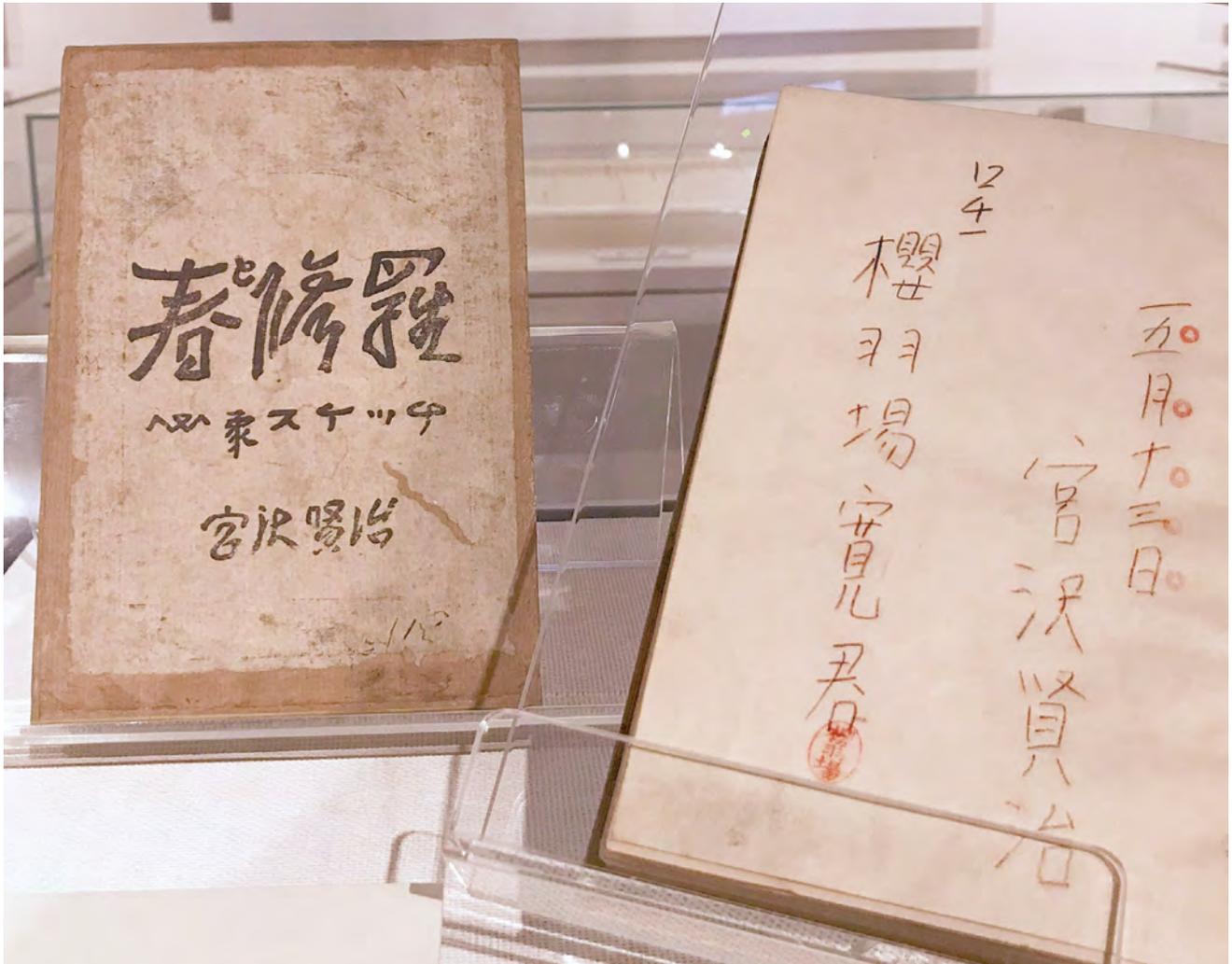


宮沢賢治記念館通信

発行 〒025-0011 岩手県花巻市矢沢1-1-36

宮沢賢治記念館

☎ (0198) 31-2319
📠 (0198) 31-2320

寄贈された『春と修羅』初版本

賢治の自筆署名

貴重な資料が“里帰り”

(詳報7面)

宮沢賢治と活動写真

法政大学 岡 村民夫



宮沢賢治記念館リニューアルの
おり映画関係のパネルの解説文を
担当したので、宮沢賢治と映画の
関係をめぐって目下私が思うところ
を書いておきたい。

これまで充分配慮されてこなかった
ように思われるのは、当

時の映画（もっぱら「活動写真」と呼ばれていた）の上映形態と現在のそれとの大きな差異である。1930年初頭まで、日本ではほぼ全ての映画がサイレント映画だったが、上映に際しては、いささかも静かではなかった。楽士による生演奏や弁士による「説明」（前口上や声色によるセリフ）を伴うのが一般的だったのだから。宮沢賢治の文学にとっては、映像としての映画に劣らず、上映される空間全体が大事だったのではないだろうか。初期の断片的短唱「冬のスケッチ」のなかで、

賢治は映画上映を、「そのとき人工の火ひらめきて／水より滋くもえあがり／またほのぼのと消え行けり」というように、物語の表象としてよりも、闇のなかでの魅力的な光の明滅として記し、続けて「なにゆゑかるとき きちがひの／透明クラリオネット、／わらひ軋り／わらひしや。」と、楽士による演奏にも言及している。

「セロ弾きのゴーシュ」の主人公の職業は「町の活動写真館でセロを弾く係り」だ。従来、賢治の洋楽受容を巡ってもっぱら議論されてきたのは、レコード鑑賞と浅草オペラだが、映画館での生演奏をもっと考慮すべきだろう。これは、ゴーシュや彼が属する「金星楽団」のモデルを、賢治自身や藤原嘉藤治、太田カールテットに探すだけでなく、それらに加えて、映画館の楽団にも探してみる必要があるということでもある。

すると、1915年に盛岡に開館した岩手県初の映画常設館・記念館の東華管弦団が、捜査線上に上る。館主の円子正^{まるこただし}は東華管弦団の楽長＝指揮者を兼ねていた。高い音楽的評価を得ていた楽団は、1927年6月、岩手県公会堂の落成式典で演奏を披露した。そのとき、チェロを担当したのは誰^{まんじょうめただし}だろう、万城目正。戦後「リンゴの唄」「東京キッド」などの映画音楽の作曲家として、一世を風靡する青年にほかならない(盛内政志『盛岡映画今昔』。「金星楽団」が演奏を披露する場所が「町の公会堂のホール」と設定されていることと符合する逸話ではないか。

活動弁士が作品に登場することこそないが、童話「雪渡り」のなかの狐の幻燈会では、子狐紺三郎が口上を述べ、観客の狐の子たち自身が、映像に合わせて紺三郎の作った歌を合唱する。弁士のパフォーマンスは、話芸の伝統を背景に、日本で特に発達したものであり、明治中期の幻燈ブームのなかで始まり、映画に応用されたという前史を持つこと(岩本憲児『幻燈の世紀』)に留意したい。

ところで、「冬のスケッチ」に戻ると、映画上映後の「キネオラマ」上演が記述されていることも興味深い。キネオラマとは、1910年前後に映画館で隆盛した見世物で、それ以前からあった「ジオラマ」が立体模型や書割りに電光の効果を添えた見世物だったのに対し、さらに映画の映写機からの動画投影を加えた点に特色があった(晴光館編集部編『現代娯楽全集』1911年)。不思議なのは、「冬のスケッチ」内の映画館に関する断章を改稿

して成った文語詩「軍事連鎖劇」において、本文で上演対象が「キネオラマ」と明記されているにも関わらず、タイトルが「軍事連鎖劇」となっている点である。「連鎖劇」とは、ひとつのストーリーを映画と演劇の連鎖を通して表象する見世物であり、1904年に東京で生まれ、1910年代に隆盛し(盛岡では「盛岡劇場」で興行されていたことが『盛岡劇場ものがたり』からわかる)、「キノドラマ」と名称を変えながら昭和初期まで存続したといわれる。映像文化史の大久保遼は、この謎に触れて、キネオラマと連鎖劇を合体させた興行もあったことを明らかにし、賢治が描いたのは「キノドラマのなかでキネオラマが使用されたきわめて珍しい例なのではないか」と推量している(大久保遼『映像のアルケオロジー』第六章)。

映像とライブ、映像と模型、あるいは映像・音楽・話芸・演劇などの諸ジャンルの混淆。もはや「映画」と呼ぶことが相応しいかどうかもわからない野放図な混成的表象文化が、宮沢賢治の時代、特に彼の少年期から青年期にかけて、日本の都市を賑わしていた。明らかに彼はその渦中を生き、その痕跡を作品に残したのだ。世界を視聴覚的に感受し、多次元多様体として表現する彼の資質が、こうした混成的表象文化に敏感に反応したという面があると同時に、その享受が彼の感受性を養ったという面もあると私は考えている。



『ファウスト』 盛岡・内丸座のチラシ
(一九二八・九・一四) 著者所蔵

「あき地」と「明地」

宮沢賢治研究会（東京） 村上英一



賢治は、同じ言葉について、平仮名で書いたり、漢字で書いたり、また、漢字で書く場合でも違う漢字を使ったりと、様々な表記をすることがある。

例えば、「おきなぐさ」では、「向ふの、黒いひのきの森の中

のあき地に山男が居ます。」（傍線は筆者。以下同じ。）とあり、その少し後に、「あれは空地のかれ草の中に一本のうずのしゅげが花をつけ風にかすかにゆれてゐるのを見てゐるからです。」とある。この「あき地」と「空地」は、特に意図があって書き分けているわけではなく、あまり意識をせずに違う表記を用いたようである。

しかし、一方で、意図的に表記を使い分けられていると思われる場合もある。

「よく利く薬とえらい薬」は、「清夫は今日も、森の中のあき地にばらの実をとりに行きました。」という文で始まる。清夫は、病気の母親の薬を取りに、いつも森の中の「あき地」へ行くのである。

ところが、この日は、清夫は、「森の中の明地」に至る。この「明地」では、ばらの実を一生懸命集めても籠の底が隠れないという不思議な体験をし、疲れてぼんやりする中で、遂に、「雨の雫のやうにきれいに光ってすきとほっ」たばらの実を見つけ、持ち帰る。それを飲んだ清夫の母親は、身体がピンと起き上がり、すっかり達者になった。

この作品は、昔話の「隣の爺型」（「こぶ取りじいさん」のように、正直じいさんが幸運を得るのを見て、隣の意地悪いじいさんが真似をして失敗する話型）を模しており、意地悪いじいさんに相当するのが、「にせ金使ひ」の大三である。

清夫の「すきとほるばらの実」の話聞き、「百人の人たちを連れて大三は森の空地に来」る。しかし、この「空地」では、「すきとほるばらの実」は見つからず、代わりに十貫目のばらの実を持ち帰る。大三は、にせ金製造場でばらの実をるつぼに入れ、ガラスのかけらと水銀と塩酸を加えて、「すきとほったもの」を製造するが、それを飲むと、アプツと言って死んでしまう。それは、「実は昇汞といふいちばんひどい毒薬」だった。

このように、「よく利く薬とえらい薬」では、

清夫がいつもばらの実を取りに行くのは「あき地」、「すきとほるばらの実」を見つけたのは「明地」、大三が行ったのは「空地」と、「あきち」の表記が異なっており、それぞれの表記のイメージが、作品の状況によく適っている。これは、賢治が意識的に表記を書き分けているものと思われる。

清夫が「すきとほるばらの実」を見つけたのは、いつもの「あき地」とは違い、この日にだけ孝行者の清夫の前に出現した不思議な場所、奇跡が起こり得る異界であり、そのような特別な場所として、「明地」と表記したのであろう。

賢治童話には、もう一つ、「明地」が出てくる作品がある。「さるのこしかけ」だ。この作品では、樫夫が、夕方、家の裏の栗の木のサルノコシカケの上に現れた三疋の小猿に先導され、栗の木の中のトンネルを駆け上がる。「もう、走ってゐるかどうかもわからない位」になると、「突然眼の前がパッと青白くなり」、「眩しいひるまの草原」に出る。そこが、「林に囲まれた小さな明地」だ。暗い中を苦勞して進み、疲労困憊したところで、いきなり明るい場所に出るという、異界への道行きの儀式（イニシエーション）を経て到達した場所である。小猿の大將は、「こゝは種山ヶ原です。」と言うが、もちろん、現実の種山ヶ原ではない。小猿たちの領分である異界であり、現実世界では夕方なのに、ここは「お日さまがあんな空のまん中にお出でになる」という不思議な場所なのである。

この「明地」では、樫夫は、小猿たちの軍事演習を見学していると、いきなり縛られて胴上げをされ、落とされそうになって、もう覚悟を決めたとき、危うく山男に助けられる。気付くと家の前に立っており、無事、現実世界に帰還していた。

危うい体験をした樫夫にとっての「明地」は、「すきとほるばらの実」を見つけた清夫にとっての「明地」とは意味合いが違うかもしれないが、共通しているのは、そこが、現実の日常世界とは違う非日常的な空間、すなわち異界であることだ。

樫夫は、賢治童話の他の主人公（例えば「どんぐりと山猫」の一郎）のような優等生的な子どもではなく、小猿の大將に対し、不遜な態度で対等にやり合ったりしており、この作品では、そのやり取りが面白い。そんな樫夫にとって、小猿たちの領分である「明地」で相手にうまくやり込められた体験は、危ない目にあったことも含め、自ら

の糧となる貴重な経験であろう。

現実世界とは違う異界の非日常的な不思議な体験を味わわせてくれるというのは、賢治作品の大きな特徴である。いつか自分も不思議な「明地」に行けることがあるかもしれない、そんな想像をすることも、賢治を読む楽しみの一つなのである。

「宮沢賢治」を未来世代に繋ぐ

札幌新陽高等学校 高橋 励 起



ひょんなことから、私はこの夏、藤原嘉藤治さんの仏壇に手を合わせていた。嘉藤治さんと言えば、賢治さんの親友で生涯に渡り賢治作品の普及に尽力した人である。そんな嘉藤治さんのお家に、私みたいな縁もゆかりもない者が、生徒と一緒に邪魔している。嘉藤治さんに誰だ、君は？と言われていたようで、とにかく必死に合掌した。何も悪いことはしていないが、恐縮してなぜか何回か謝った。どうして自分が今ここにいるのか…とても不思議な時間だった。

遠くなだれる灰光と
貨物列車のふるひのなかで
わたくしは湧きあがるかなしさを
きれぎれ青い神話に変へて
開拓記念の楡の広場に
力いっぱい撒いたけれども
小鳥はそれを啄まなかった

賢治さんが遺した心象スケッチ「札幌市」である。「札幌市」とタイトルがついた作品であるが、札幌市民にはあまり知られていない。私は札幌の高校で国語科教諭をしているが、2018年に東京書籍の協力のもと、この「札幌市」をメインに生徒と一緒に副読本『青の旅路 宮沢賢治と北海道』を出版した。出版にあたっては、宮沢賢治記念館の宮澤学芸員に大変ご尽力いただいた。

なぜ、副読本出版に至ったかという、高校国語の教育現場において、「文学」や「詩・短歌・俳句」が軽視され、「論説文」重視の授業が展開されており、賢治作品も少しずつ取り扱われなくなっているという現状を目の当たりにしたからである。実際に、教科書を扱う業者との話の中で、「賢治作品は難解で、先生方も敬遠している」という

言葉を耳にした。

難解だから取り扱わなくて良いのか？良くはないが、どうしたらもっと賢治作品が身近になると考えたときに、賢治さんが北海道に3度訪れ、そこで作品を残していることを思い出した。「宮沢賢治と北海道」というテーマで生徒自身が教科書を作ったら、より身近に感じるができるのでは、と考えた。

だが、それでもなぜ北海道の高校生が宮沢賢治？と皆さんは思うかもしれない。全くその通りで、私たちは全く縁もゆかりもない…はずだった。だが、やってみるものである。副読本作成を行っていた高校生のひとりが、賢治さんが北海道に修学旅行引率で来た際に遺した「修学旅行復命書」を文字起こししているときに「先生、ここに書いてある駅前山形屋旅館って、うちの祖先の家です」と報告をしてきたのだ。もちろん私も驚いたが、一番驚いていたのは生徒本人で、まさか自分の祖先が経営していた旅館に宮沢賢治が宿泊していたなんて、露程も思わなかっただろう。

考えてみると、私も賢治さんの作品に意図しないところで出会っている。はじまりは高校1年生のとき。私の父は科学者で、普段文学とは疎遠に思えた。そんな父から、ある日私は一冊の本を手渡された。「この詩、面白いから読んでみる」と突然渡された文庫本。見ると『新編 宮沢賢治詩集』とあった。ああ、『よだかの星』とか『オツベルと象』の人か。その時、私にとって宮沢賢治という人物は、国語の教科書に出てくる、随分変わった文章を書く、そんな人という印象であった。

特に、詩に興味もないのに、なんでこんな本を…と気乗りしない私だったが、ふとめくったページに衝撃を受けた。確か「薤露青」だったと思う。目の前に、果てしない宇宙空間が飛び込んできた。文を読んで初めての体験だった。

私は北海道帯広市に育った。雄大な自然に囲まれ、遮るものがない夜空には、いつも空いっぱいの星たちが瞬いていた。この情景をなんとか文字で表現することはできないだろうか、といつも思っていた。なんとか試みたことはあったが、通り一遍等の表現力しかない私にとって、それは不可能なことだった。それをこの宮沢賢治という人は、見事にやってのけていた。これが、心象スケッチと私との出会いだった。

また、大学3年生のときにゼミを選ぶ際、なん

となく選んだゼミが「環境文化論ゼミ」で、教授が宮沢賢治好きだったことから、再び意図しないところで賢治作品を読むことになった。しだいに、自分の中で賢治さんの存在が大きくなっていく、そんな気がした。

現在、私は副読本を元に賢治作品の啓発活動、また「札幌市」をはじめとする北海道ゆかりの賢治作品の研究を進めている。先の藤原嘉藤治さん宅への訪問も、そんな活動を通じての出会いから生まれた。

実際に今、賢治作品の研究を進めている中で感じていることは「次の世代に繋ぐ」という危機感である。私が研究している題材も、最後に関係する論文が出されたのは30年も前だ。詳しく話を聞きたくても、すでに他界されている方もいる。私

たちの世代が、こうした賢治さんの研究をしっかり引き継がないと、文化はあつという間に過去に消えてしまう。

未来世代の若者に、何を残せるのか。賢治研究に関わる皆さんと、ぜひ真剣に考えていきたい。



結い — 賢治が繋ぐ心と心 —

「ただいま！またくるね！」

ものがたりグループ☆ポランの会 代表 彩木香里



ものがたりグループ☆ポランの会は2004年に東京で産声をあげた宮沢賢治の童話と詩を上演している劇団です。発足当初は作品をしっかり読んだ事もなく、ただ必死になって童話をひとつ覚えて舞台に立っていました。

花巻はとても遠い所だと感じていたので一度も訪れることのないまま物語を想像で組み上げていました。専ら書籍や論文から知識を増やし、何となく解っているような気になっていたのです。

いや、ちがいました。そうじゃありません。

花巻の空気を吸って初めて、雲の流れや、木々のざわめき、大地の感触、星の瞬き、風の音…それらすべてが活字となり、ひとつのものがたりが出来上がっていたことに気がきました。その後から頻りに花巻に通うようになりました。何も知らない私たちに何年もかけて花巻の歴史や賢治さんの事を一から教えてくださったのは、地元・石鳥谷の菊池善男さんです。菊池さんと一緒に、大迫、

種山ヶ原、雫石…と賢治さんゆかりの地を辿ってゆく中で沢山の人と出会い、身体で感じることの大切さを教わりました。

2012年、初めてイーハトーブ館のホールの扉を開けた時、ここで語ってみたいな…と心躍るような感覚になったことを覚えています。ここから賢治さんを通してたくさんの人と出会えたらいいな…というただ漠然とした「夢」でした。

2016年から隔月で朗読会を開催させていただけることになりました。同年、童話村にある「白鳥の停車場」の駅長さんとの出逢いがきっかけでそこに集う賢治ファンの方々との交流が深まり、今年の6月には「白鳥の停車場」で知り合ったメンバーと早池峰登山に挑戦！「山の黎明に関する童話風の構想」の風景に遭遇して盛り上がりました。



「ただいま！また来るね！」学ぶために通い始めた花巻が、いつもあたたかく迎えてくださっている皆さまのおかげで、すっかり心と和む第二の故郷になっています。

そして、イーハトーブ館で年に1回開催している「ポラン寄席in花巻」が今年の10月に3回目を

迎えます。今年度は賢治さんを通して知り合った岩手の方々との、念願のコラボレーション企画です。

一緒に稽古が出来なくても、離れていても「心」は繋がっている！

どんな化学反応が生まれるか楽しみでなりません。

大槌宮沢賢治研究会の地誌学

大槌宮沢賢治研究会 事務局長 吉田 基



まだ復興工事の槌音がやまない平成26年度の年の暮れに、大槌町の津波被災地を見下ろす中央公民館にて宮沢賢治と大槌町の関わりについて展示する企画展「イーハトーヴォと三陸海岸」を現メンバーの一部で開催して

いました。

期間中には、大槌産「薔薇輝石」の展示の他、講演会なども開催し、1925年に賢治が歩いた三陸海岸のルートに思いを馳せながら、多くの町民が宮沢賢治の世界に触れることができました。

賢治が生きた37年の生涯を思いながら、私たちが考えたことは「この生かされた命をどのように使えば亡くなった方に報いることができるだろうか？」という問いでした。「世界中からの支援に対して、どう応えていけば意味ある人生になるのだろうか？」、賢治が問い続けた「ほんとうの幸」を希求する気持ちが日に日に大きくなっていきましたが、答えは意外にも子どもたちの作文の中がありました。

「大きくなったら救急隊員になりたい」「看護師になりたい」「自衛隊に入りたい」「警察官になりたい」…心に傷を負っているはずの子どもたちの誰かのために生きようとする言葉には逞しさすら感じられ、私たち生かされた大人の責任として、賢治の「利他の精神」を広めることを使命とする『大槌宮沢賢治研究会』を発足させました。

活動は講演会や音楽祭、朗読会など多岐にわたり、町内での薔薇輝石探しや賢治作品の映画上映会、三陸賢治サミットなども行ってきましたが、活動の中心は1925年に賢治が三陸を旅した際に残した旅程幻想詩群にまつわる詩碑の建立で、これまで全国の支援者からのご寄付などにより、大槌町内に「暁穹への嫉妬」（平成28年9月）と「旅程幻想」（平成31年3月）の2基の詩碑を建立することができました。



今後の活動目標は、三陸鉄道やSL銀河などを使いながら1925年の賢治の旅を追体験できるツアーの造成や三陸各地に残る賢治詩碑のガイドなどを通じて、「ポラーノの広場」に詠まれたイーハトーヴォ海岸のような“おもてなし”を実現することです。これらのツアーが実現した暁には、ぜひ三陸にお越しください。



来館者の声

記帳ノートから

No.390 ~ 393 (平成31年1月2日~令和元年5月13日)

以前から来てみたいと思っておりましたが、この度見学する機会を得ることができ、展示内容の充実さに驚かされました。「雪渡り」は、戦前の雑誌「愛国婦人」に掲載されていたとのことですが、その発行団体「愛国婦人会」の創設者・奥村五百子女史は（自分と同じ）唐津出身であることを思い出し、遠く離れたふたつの地を結ぶ歴史のエピソードに感慨を深くしております。

宮沢賢治を初めて知ったのは、小学生の時に読んだ「よだかの星」でした。生まれて初めて、物語で泣きました。

「ひかりの素足」「十力の金剛石」では、なんと美しい話があるかと感動しました。「風の又三郎」は映画も見ました。

今でも賢治の世界に触れると、あの透明で冷たい、しかし救いと慈愛に満ちた優しさが甦ります。ここに来て、本当によかったです。

中国から来ました。「雨ニモマケズ」を読んで賢治さんのfanになりました。どうしてこんなに優しい人が生まれるか、ここに来て分かりました。こんなすてきな場所。この場所こそ、宮沢賢治を生んだ夢のような世界。夢のような宇宙。勉強させていただきます。「そういう人に、私はなりたい」

大沢温泉とセットで、東京から娘と来ました。15年ほど前に、家族旅行で大好きな宮沢賢治の

記念館に来て、大満足して帰りました。隣の山猫軒にも寄って…夫が亡くなり家族にも変化がありました。そんな中、賢治の世界観、童話の世界は、ほっとするものがあります。今回の特別展「雪渡り」も大変魅力的でした。

九 州福岡から来ました。小学生の時からずっと読み続けた宮沢賢治の童話。私の中でずっと生き続けてきました。小学校の図書館の司書室に入り浸って、寝転びながら読んだ思い出が私の原風景です。

退職して一番に選んだのが、この花巻の旅です。やっと来ました。私の中で、ずっと生き続けている絵本・童話の世界の再発見ができました。ペコ石、グスコブドリ、ジョパンニに会えた気がしました。

高 校2年の頃、生家を訪れ清六さんにお会いしました。「永訣の朝」の「…まがったてっぽう玉のように…」、この真相を知るべく仙台から訪ねました。玄関を入れてすぐの部屋で「雨ニモマケズ」手帳を拝見させて戴いたのは、本当にありがたい思い出です。とし子さんのいらした部屋をお教え戴きました。

清六さんの静かな語り口は、本当にやさしく、高校生の青二才に丁寧に、兄賢治の人柄を語って下さる姿が印象に残っております。「高村光太郎さんの住家を見ていきなさい」と言われたことが不思議でした。「なぜここに光太郎…？」とお尋ねしたら、「あなたが学んで下さい」とおっしゃられました…

国 語教師をしています。賢治の世界観は深淵過ぎて、知ろうと思えば思うほど、賢治が遠ざかっ

て行く気がします。「銀河鉄道の夜」を扱うので、生徒には「賢治は分からない」ということを分からせる授業ができれば、と思います。

小 中学校の国語の授業でも作品を読んだのに、「宮沢賢治」にはまったきっかけは、漫画「文豪ストレイドッグス」を読んで、という今時の感じ。きっかけは何でもいいんだ、と思います。令和最初に訪れた場所。この思い出は大切にしていきたいです。キャラクターも含め、詩人他諸々の「宮沢賢治」を愛し続けます。(高2女子)

「一日に玄米四合とミソと少しの野菜」では足りません。私は、今夜じゃじゃ麺をたくさん食べます。賢治さん、ごめんなさい。

広 島県の山間部の町から来ました。自然にあふれる地域なので、同じような所かと思いましたが、広がる山嶺の美しさは、やはり違うなと思います。宮沢賢治の作品が、この素晴らしい景色、空気の中で育まれたものかと思うと、情景を思い浮かべて、読んでいない作品も含め、もう一度読み直してみたいと思いました。



一生懸命ノートに向かう
将来の「賢治さん」

■自筆署名入『春と修羅』初版本 花巻市に贈呈

5月24日、神奈川県の大田ゆき子さん（花巻市太田出身）より、賢治の自筆署名の入った『春と修羅』の初版本が花巻市に寄贈されました。

廣田さんのお父様である安藤（旧姓：桜羽場）寛さんは、同市中根子生まれで当時の延命寺が自宅。賢治の花巻農学校時代の教え子の一人で、花巻市内の小中学校の教諭等を経て、西南中学校の初代校長を務められた方です。『春と修羅』が出版された1924年（大正13年）に賢治から直接贈られたといわれています。

賢治は、農学校から近かった延命寺を訪れ、その時家にあった鉛筆で「五月十三日 宮沢賢治」「桜羽場寛君」と記したそうです。



上田市長と廣田さん

市役所で行われた寄贈式、上田東一市長は、「実物を確認できてうれしい。大切に保存して後世に残さなければいけない」と謝意を述べました。

また、廣田さんは、「年月を経て、とても貴重

なものとなり、父と賢治さんの故郷花巻で保管してもらったのが最良と思った」「父の名は賢治作品にも登場しており、とてもかわいがられた。故郷に戻ることになり、父も喜んでいと思う」と語り、ほっとした表情をしていました。

現存している『春と修羅』の初版本は約40冊。売れ残った初版本は、賢治が出版社から引き取り、身近な人たちに贈った例があるといわれています。その上、確認されている賢治自筆署名本は2冊と、大変貴重な資料が、長い年月を経て里帰りしてくれました。本当にありがとうございました。

当館では、95年を経過しやや劣化している寄贈本を修復し、広く公開していく予定です。

■「賢治の世界」セミナー 2019

花巻市の子どもたちと「賢治」の出会いの場として、大変意義深い「賢治の世界」セミナー。今年度は、昨年度から4校増え、20校22会場、約3,000人の小中高校生が受講する予定です。

新たな領域の開拓と、本セミナー受講世代ともいべき若い講師の発掘もあわせて事業を始め、8月までに9会場を終えています。

2会場目の南城小学校では、PTAとの共催という試みにより、600人もの観衆の前で「賢治さんと音楽」が行われました。

3会場目の八幡小学校では、星鴉宮さんによる一人芝居「どんぐりと山猫」。賢治と本当の「出会い」となる1・2年生が対象でしたが、



星鴉さんと八幡小児童

真剣な眼差し、最後までピンと伸びた背中、そして身を乗り出して聞き入る姿に、「最高の出会い」の手ごたえを感じました。あわせて、この子たちがこれからどんな「賢治とのかかわり」を作っていくしてくれるのか、期待の膨らむセミナーとなりました。

9月からは、新領域となる「復興と賢治さん」で「風の電話」の佐々木格さん（大槌町）、西和賀町の写真家・瀬川強さん、いくつもの星の発見で知られる天文学者・小石川正弘さん（仙台市）、黒猫舎の若手役者・松本亜季さん（盛岡市）などが新たな講師として加わります。ますます充実した講師陣によるセミナーを、子どもたちとともに楽しみにしたいと思います。

特別展 アラカルト

◆大人気!! 寓話「猫の事務所」



世の中の猫ブームが後押しをしたか、

7月15日まで開催されていた「猫の事務所」は、連日大賑わいでした。

展示室には、職員手作りの導入映像に見入る姿、パネルによる雑誌掲載版と初期形稿を見比べながら、掲載までの手直しの変遷をたどる姿があふれていました。

また、伊藤学芸員が描いた、愛らしくユーモラスなネコたちの姿が大人気で、図録を求めお客様が列をなし、「来館者ノート」もなぜかこの期間、猫のイラストがあふれていました。

◆絶賛開催中!! 童話「祭の晩」

各地から秋祭りの便りが届くこの時期、特別展は、童話「祭の晩」を開催しています。

賢治作品に登場する「山男」の伝説なども合わせてお楽しみいただくとおもいます。期間は、10月27日(日)までとなります。



◆まもなく開催 童話「貝の火」

「貝の火」は主人公の子兎ホモイを通じ、善い行いをすれば善いことが自分におき、逆に悪いことをすれば、それが自分に返ってくるといった因果律をテーマとした作品です。

この作品は生前未発表のものですが、弟妹への読み聞かせをしていたことや、当時賢治が勤めていた農学校で、同作品を生徒が筆写したというエピソードが残っています。

会期中は41枚の直筆稿を順次公開し、作品の魅力や創作の背景などを紹介していきます。

会期 2019年11月2日(土)～2020年5月10日(日)

直筆稿の公開期間は、

- ①11月2日(土)～11月10日(日)第1～12葉
- ②1月11日(土)～1月19日(日)第13～24葉
- ③3月20日(金)～3月29日(日)第25～31葉
- ④5月2日(土)～5月10日(日)第32～41葉

※ 各公開期間の前後1日は、資料入替のため特別展示室を閉鎖します。

* 編集後記 *

この夏、開館以来の来館者が750万人に達しました。「来館者ノート」を見ていると、県外はもとより海外からのお客様、また、かなりの時間を空けてのリピーターの数が増えているように思います。その息の長さ、幅広さ、根強さは、賢治に心を寄せて下さる皆様の特徴といえるかもしれません。

そしてまた、県内外に広がる研究組織や表現・活動団体や個人。その多さを見ても「宮沢賢治」という存在の大きさをあらためて感じます。

そんな稀有の「存在」とおして結ばれた心と心を、少しでも全国の皆さんにお知らせしたく、今号より「読者の声」欄を模様替えし、「結い-賢治が繋ぐ心と心-」を新設いたしました。

県外からは、心のこもった表現活動を展開するボランの会の彩木さん、県内からは、被災地でクラウドファンディングによる詩碑建立など、復興に邁進する大槌賢治研究会の吉田さんにご寄稿いただきました。

おふたりの精力的な活動ぶりに、深い感銘を受けるとともに、これを機会に、また新たな「結い」が生まれてほしい、と願うばかりです。